PR

人生100年時代の健やかなひざのために

広がるひざ治療の選択肢

中高年世代を悩ませるひざの痛み。その原因の多くは、変形性ひざ関節症によるものです。これまでの治療は、ヒアルロン酸注射といった保存療法で効果が得られなければ、手術をおこなうことが一般的でした。しかし近年、新たな選択肢として「バイオセラピー」が注目されています。そこで、ひざ治療について整形外科専門医である百瀬整形外科スポーツクリニック院長の百瀬能成先生にお話を伺いました。

一般社団法人MOSC
百瀬整形外科
スポーツクリニック
（松本市）
院長 百瀬（ももせ） 能成（たかしげ） 先生

●専門領域
スポーツ傷害・下肢関節疾患・リハビリテーション・再生医療

●資格・所属学会
日本整形外科学会専門医・指導医／日本整形外科学会認定運動器リハビリテーション医／スポーツ医／日本スポーツ協会公認スポーツドクター／日本医師会認定健康スポーツ医／日本人工関節学会認定医

ひざ治療は手術以外の選択肢も

変形性ひざ関節症とは、ひざ関節の軟骨がすり減り、炎症を起こして痛みや腫れが生じる疾患です。症状が進行すると骨が変形し、日常生活にも大きく影響します。自覚症状がない方も含めると国内で2500万人以上いると推定されており、もはや国民病といっても過言ではありません。年齢とともに少しずつ進行していくため、ひざに違和感や痛みを感じたら注意が必要です。

変形性ひざ関節症に対する治療法としては、初期の症状であればヒアルロン酸注射などの「保存療法」、その効果が得られなくなり末期になってくると「手術療法」を選ぶことが一般的でした。そうしたなか、「保存療法」と「手術療法」の中間に位置するものとして、「バイオセラピー」が注目されています。手術するほどではないがヒアルロン酸注射では思うような効果が得られない、という方が選択肢のひとつとして検討できる新しい治療法です。

例えば新しい選択肢「PFC-FD™療法」

バイオセラピーのひとつに「PFC-FD™療法」があります。これは、人がもともと持っている"治癒する力"に着目したもので、例えば、すり傷ができた時に血小板などの働きによってカサブタができて修復されるように、「PFC-FD™療法」は血液に含まれるこうした"血小板の働き"を活用する治療法です。治療方法はとても簡便で、患者さんの血液を採取し、専門機関で加工した後、関節内に注射して完了です。

痛みを抑える抗炎症作用が期待でき、プロスポーツ選手のケガの治療にも用いられています。

この「PFC-FD™療法」は新しい治療法のため自由診療となるほか、期待される効果は患部の状態などによって変わるため個人差がある点は注意が必要です。しかし、手術のいらない注射のみでおこなう治療のため、長年治療を続けているものの思うようにひざの状態が改善しない方や、まだ手術には踏み切れない方が検討してみてもよい選択肢のひとつだと思います。

「PFC-FD™*療法」治療のながれ

1 診察
ひざの痛みの程度などについてお伺いします。

2 採血
約50mLの血液を採取し、専門機関に送ります。

3 専門機関で加工
専門機関にて血液を加工します。
およそ3週間

4 患部へ注射
採血からおよそ3週間後に、患部に注射して完了です。

*PFC-FD＝Platelet-derived Factor Concentrate Freeze Dry　※PFC-FDはセルソース株式会社の保有する商標です。

早期受診が、治療の選択肢を広げる

これまで述べてきたようにひざ治療の選択肢は昔と比べて増え、患者さんの症状に合わせて選べるようになってきました。しかし、ひざに違和感や痛みがあるのに我慢を続け、いよいよ我慢できなくなって初めて受診したころには末期の状態にまで進行していた、となってしまうと、本来選べたはずの治療も選択できなくなってしまいます。ひざ治療は、早期に治療を開始して"進行させないこと"が肝要です。人生100年時代、健康寿命の延伸という観点からも"ひざの健康"は欠かせません。違和感や痛みがあったら、すぐに専門医に相談することが大切です。早期受診でひざの状態を正しく把握することが、治療の第一歩です。

ひざの痛みに悩むすべての人へ
ひざ治療に関する情報を掲載しています

企画・制作：セルソース株式会社

ひざの相談窓口
運営：セルソース株式会社
050-1731-8989 受付時間 【平日】10:00〜12:00／14:00〜17:00
※土日祝日は受付時間外です